

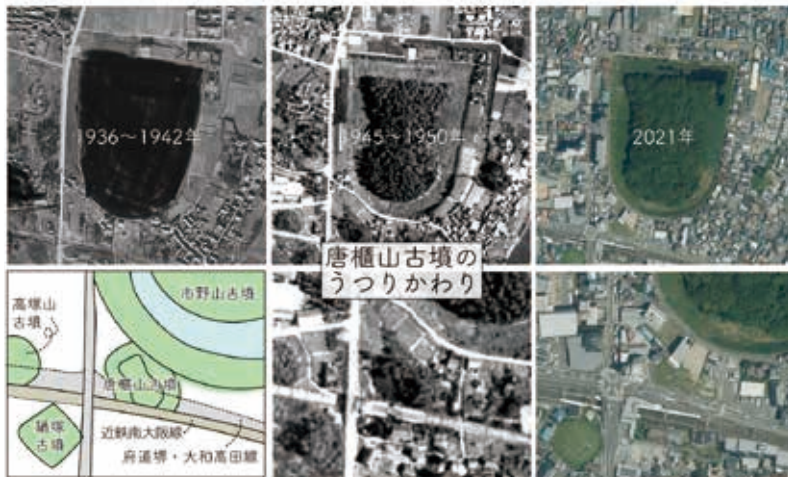
近鉄南大阪線の土師ノ里駅北側に所在する唐櫃山古墳では、令和2年から毎年発掘調査を実施しています。発掘調査は古墳が造られた当初の姿を確認するためのもので、調査によって多くのことが明らかになりました。唐櫃山古墳とはどんな古墳だったのか、調査成果によって何が変わったのかについてお話していきます。

唐櫃山古墳は、近鉄南大阪線土師ノ里駅のすぐ北側、府道堺・大和高田線沿いに位置します。5世紀後半に築造された全長59mの帆立貝形前方後円墳で、北東には允恭天皇陵(市野山古墳)があります。現在ではフェンスに囲まれ、古墳の大部分が失われていることから、築造当時の姿を想像することは難しい古墳になっています。

この古墳を語るうえで、キーワードとしてあげられる言葉は「陪冢」、「帆立貝形前方後円墳」、「石棺」の3つです。今回は唐櫃山古墳とはどういった古墳なのか、という概説的な部分をお話します。

唐櫃山古墳は、近鉄南大阪線の線路敷設で少し削られ、府道堺・大和高田線の敷設で墳丘の大半が失われました。昭和30(1955)年に調査が行われ、竪穴式石槨に石棺が埋納されていたことがわかっています。その後、平成12(2000)年度、平成19(2007)年度、平成21(2009)年度の歩道拡幅工事に伴い、大阪府教育委員会による調査が実施され、古墳の築造方法や周濠が確認されました。部分的な調査でなかなか全貌はわかりませんでした

が、当市教育委員会によって、平成24(2012)年に調査が実施された際に、前方部や後円部上段に葺石が、後円部テラスには埴輪列が伴うことがわかりました。古墳の大部分は失われてしまいましたが、残された部分の遺存状況が良好なことや、大規模な前方後円墳



「唐櫃山古墳のうつつりかわり(国土地理院地  
図より作成)」

唐櫃山古墳の発掘調査から  
①唐櫃山古墳の概説

の周囲にある帆立貝形前方後円墳であることが評価され、国史跡に指定されることとなったのです。

次回からは先に挙げた3つのキーワードを中心として、唐櫃山古墳とはどういった古墳だったのかを説明していきます。

(文化財保護課 泉 眞奈)